

佐土原キリスト教会 2023年1月1日

聖書箇所：マルコ福音書 13章 28～31節

説教題：主の言葉は滅びず

良い新年をお迎えのことと思います。今年もよろしくお願ひ致します。

さて私は「Menno's Rein(メノーの手綱)」というドラマ―(メノナイト 500の歴史を1時間くらいにまとめたビデオです)―が好きで、大きな影響を受けたのですが―(これは申し上げて良いのか悪いのか…昨年「アナバプテスト・セミナー」の準備をしているとき、その「Menno's Rein(メノーの手綱)」が、YouTube にアップされているのを見つけました)―その中にこんなシーンがあります。「アナバプテストが隠れて住んでいるアルプスの小屋に皇帝の兵がやって来ます。そして『アナバプテストを匿うと処罰を受けるが、告発したら懸賞金が出るぞ』と脅して去って行きます。その家の天井には、追われていたアナバプテストの家族が隠れていて、兵士が去った後、皆で食事をします。その時、家の主人が隠してあった聖書を、宝物を触るように取り出して、仲間の1人に渡します。その人が、聖書を開いて御言葉を読むのですが、御言葉に触れて、何とも言えない喜びの表情をするのです。「あんな思いで聖書の言葉に触れているだろうか」と思われる場面です。キリスト教は「言葉の宗教」だと言われます。何にもまして信仰の中心は「聖書の言葉」であるべきです。皆さんは、今年どれくらい聖書を読まれたでしょうか。今朝はタイトルを「主の言葉は滅びず」としました。ここには、御言葉の大切さが語られています。今朝も「内容」と「適用」に分けてお話しします。

1：聖書の内容～主の言葉は決して滅びない

「終末」に関するイエス様の説教が続きます。13章の初めで、弟子達がエルサレム神殿を見ながら言いました。「先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう」(13:1)。その時にイエスは「神殿もやがて滅びるのだ」と言われました。弟子達は驚きました。そして「この神殿さえも崩壊するようなことがいつ起こるのですか」と聞きました。そこから「終末」についての長い説教が始まりました。

今日の箇所は、3番目のまとまりになります。前回は「イエスが、この時から40年後―(紀元70年)―に起こるローマ軍による『エルサレムの占領、破壊、神殿の破壊』の出来事と、やがて終末時代の最後に起こる出来事、この2つのことを見ながら、それを1つの言葉で預言された」ということを学びました。今日の箇所も、基本的には「終末時代の終わりの大患難時代の出来事」、それに続く「イエスの再臨の出来事」に焦点が当てられています。しかしここにも紀元70年に起こる辛い出来事が意識されている、そのようなことを念頭に読むと分り易いと思います。

そうした時、イエスは28～29節で「いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります。そのように、これらのことが起こるのを見たら、人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」(28～29)と言われました。「これらのことが起こるのを見たら」、まず「これらのこと」とは何でしょうか。それは、イエスが13章3節から語って来られた「終末時代の終わりに何が起こるか」ということです。前々回も申し上げましたが、イエス様の十字架と復活の後、聖書の理解では「終末時代」に入っています。今は終末の時代です。その終わりに起こることです。6節には「惑わす者が現れる」とあります。7節には「戦争の騒ぎや戦争の噂を聞く」とあります。8節には「民族間、国家間の争いと、地震や飢饉が起こる」とあり、9節では「キリスト者が信仰の故に憎まれる」とあります。あるいは14節には「憎むべき破壊者が立ってはならない所に立つ(立って破壊を始める)」とあります。イエスが言われたことをピックアップすると、そういうことです。そういうことが起こるのを見たら「人の子が戸口まで近づいていると知りなさい」(29)と言われる。「わたしの再臨が間近に迫っていると悟れ」と言われるのです。

しかし、では「それはまだまだ先のことだ」と思って良いかということ、今、私がピックアップしたようなことは、終末時代の終わりに起こる出来事であると同時に、一方では紀元70年に、

あるいは初代教会の時代に、あるいはそれ以降の歴史の中で、既に起こったことです。ということは、今、私達の時代にも、いつ再臨が起こってもおかしくないということなのです。ある学者は「1948年のイスラエル建国以降、いつ再臨が起こってもおかしくない、条件は全て整った」と言います。イエスは言われました。「これらのことが全部起こってしまうまでは、この時代は過ぎ去りません」(30)。ということは逆に言うと、「これらのことが起こったら、この時代は過ぎ去る(滅び去る)」ということです。「この時代」というのは、この御言葉を読む人にとっての「この時代」であり、私達にとっては、今のこの時代です。その意味で私達は、いつ天地が滅びるか分らない、いつそれが起こってもおかしくない時代に生きているのです。(新年早々、相応しくない話かも知れませんが…)

そして31節でもイエスは「この天地は滅びます」(31)と言われます。「天地」とは「天地万物」のことですから、そこには私達も含まれます。全てのものは滅びる。そう考えると、恐ろしいことを言っておられる気がします。なぜ、天地は滅びるのか。先週も申し上げましたが、それは「世に対する裁き」なのです。この世には不正があり、恐ろしいほどの悪があります。私達はウクライナ戦争にも理不尽なものを感じます。どこかで裁きを期待する思いがあります。人間の歴史は、そう言ったものを抱えながら流れています。しかしそれに対して何の決着もつけられないで、どこまでもズルズルと流れて行くわけではないのです。必ず神がそのような出来事の全てに決着をつけられる時が来るのです。「天地が滅びる時」というのは、神様の側から言えば「世に対する裁きの時」なのです。

しかしこの個所の最初で、イエスは「いちじくの木から、たとえを学びなさい。枝が柔らかくなって、葉が出て来ると、夏の近いことがわかります」(28)と言われたのです。患難時代、苦しみの時代、悲しみの時代、それはいわば冬の時代です。冬のような苦しみが起こる。ユダヤの冬は雨の季節です。しかし自然の営みにおいては、そのような寒い雨の季節は、しかし春に続き、夏に続くのです。ユダヤの春はごく短いそうです。「春はたった一晚、一晚過ぎるともう夏になる」と表現した人がいるくらい春は短い。だからイエス様は、春を通り越して「夏が近い」と言われます。でもその夏は、実りの季節なのです。喜びの季節です。力みなぎる季節なのです。イエスは「天地は滅びる」と断言されますが、しかし「その時に喜びの季節が始まるのだ」と言われるのです。その意味でこの預言は、恐怖を与えるための預言ではありません。むしろ希望を与えるためのものです。

しかし、どうして「天地の滅び」の中に「喜び」を見出せるのか。全てが滅びる時に滅びないものがあるのです。「しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません」(31)。イエス様の言葉は滅びない。つまり「イエスが語られたこと、イエスが預言されたこと」は滅びないのです。その「滅びないイエスの言葉」に私達の魂がしっかり繋がっている限り、その滅びの出来事は、そこを突き抜けて新しい世界の始まる時になるのです。「新約聖書」は、「再臨の時」について信者に次のような希望を語ります。イエスは言われました。「わたしが(父の家に)行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです」(ヨハネ 14:2~3)。再臨は、主が私達を迎えて下さる時であり、その時、イエスは、私達の魂と共に肉体も救って下さる。パウロは言いました。「私たち自身も…私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます」(ローマ 8:23)。その時イエスは、ご自身の栄光の体に見合うように私達の体も変えられる。つまり世の滅びは、御言葉に繋がっている者にとっては、「新しい者」に変えられる機会となるのです。朽ちるものは、朽ちないものを受け継ぐことは出来ないのです。私達は朽ちないものに変えられなければならない。その変えられる時なのです。そしてそれはまた、御言葉に繋がっている者にとって、私達が地上でどう生きたのか、どう天に宝を積んだか、どう忍耐したのか、どう愛したか、そういうことに対する報いを頂く時でもあるのです。その意味で、希望の時なのです。このことをCSルイスは次のように表現しています。「その時、全宇宙は夢のように溶け去り、何かが一われわれがかつて思い浮かべたこともないような何かが一すさまじい勢いで押し寄せてくるのである。それは、ある人達にとってはあまりにも美しく、他の人達にとってはあまりにも

恐ろしいものであって…それは、あまりにも圧倒的なものなので、すべての人間に、抵抗しがたい愛か、さもなければ抵抗しがたい恐怖を叩きつけずにはおかないだろう」。やがて、イエスが扉を開けて入って来られるのです。

だから 23 節に「気をつけていなさい」(23)とありました。「気をつけていなさい。目を開けてみるべきものを見ていなさい。耐え忍びなさい。しっかり立ちなさい」、そう言われ、さらに今日の個所でイエス様は、数十時間後に迫ったご自分の十字架を見据えながら「私は十字架につく、しかし私は甦りの命に生きる。そしてまた帰って来る。たとえ私が見えなくても、私はすぐ戸口に来ている。それを信じて生きて行きなさい」、そのようなメッセージを込めて、励ましを与えようとされていると思います。だからこそ私達も、いつイエス様が扉を開けて入って来られても良いような、再臨に備えた生き方を忘れてはならないと思うのです。

2：信仰生活への適用～滅びない御言葉に生きる

この個所が私達の信仰生活に語る一番のことは、「御言葉に生きる」ということです。天地は滅びる。私達が頼りにしているように見えるものは、やがて全て滅びるのです。ある落語家が自分の経験を語っていました。彼のお父さんはブリキ職人で、家には神棚を飾って朝晩拝み上げていました。朝には「今日も一日よろしくお祈りします」と拝み、夕には「一日やらせて頂きました。ありがとうございます。明日もよろしくお祈りします」と拝み上げていた。ところが大阪に大空襲があり、爆弾や焼夷弾が落ちて来た時、真っ先に倒れて落ちて来たのは、頼りにしていた神棚の神様だったというのです。「神様だから、もう少し頑張っただけ良かった」と彼は言っていました。彼にとって「頼りにしていたものが全く頼りにならないものであったこと、頼りにならないものを頼りにしていたことを見せ付けられた瞬間だった」のではないのでしょうか。

しかし私達も笑えない。なぜかというと、世の全てのものが滅びる中で「唯一滅びないものは私の言葉だ」とイエスは言われる。だからこそ、教会では毎週、御言葉が読まれます。私達は、聖書を読み、御言葉に触れるように奨められます。でも私達は、イエスの言葉にどれだけ頼り、どれだけ御言葉に生きているだろうか、それが問われるのではないのでしょうか。唯一滅びないもの、私達を救うものは、主の御言葉だと信じるなら、私達はその御言葉を生活に引き入れ、生きる現実に引き入れ、心に、魂に、御言葉を沁み込ませ、私達のどこを切っても御言葉の香りが匂い立つ、そういう信仰生活をしたいと願わされるのです。イエス様は、悪魔の誘惑を受けられた時、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる」(マタイ 4:4)と言われました。そういう生き方をしているだろうか。ある時、ある所で「私はクリスチャンだ」とおっしゃりながら、「聖書の御言葉に全く興味がない」という感じの方にお会いしました。クリスチャンをクリスチャンにするのは、もちろん聖霊の働きですが、でも具体的には聖書の言葉です。その方はそれがありませんから、結局、自分の常識だけで信仰生活をなさっているように見えました。そうしたら、神を知らない方とあまり変わらない。神と交わることも難しいのではないのかなと、私は思いました。

私達は神の言葉に生かされなければならない。そして、神の言葉に繋がることは、再臨の時だけではない、今も私達を様々に救うのです。「わたしの言葉は滅びない」とはそういう意味でもあります。御言葉は、今も生きて働くということです。「アポロ 13 号」の話をよくご紹介しますが、月に向かってアポロ 13 号は、途中で酸素ボンベが爆発するという大事故を起こします。宇宙船としては致命的な事故で、飛行士が生きて地球に帰れる可能性はほとんど無いという事故でした。しかし 3 人の飛行士は帰って来るのです。彼らが帰って来ることが出来た理由が色々ありましたが、一番大きな理由として飛行士達が言い、回りの人々が認めるのは、飛行士達が諦めなかったことです。なぜ、彼らは諦めずに希望を持ち続けることができたのか。彼らは宇宙船の中で聖書を開いて「神は真実な方です。あなたがたを耐えることの出来ないような試練に合わせることはなさいません。むしろ、耐えることができるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます」(1 コリント 10:13)という言葉を読んだのです。そして、この

言葉を握って「神は必ず私達を脱出させて下さるに違いない」と信じたのです。酸素も電気もなくなって来る、寒さが増す、死が現実に出て来る、そのような暗やみの状況の中で、神の言葉によって励まされ、希望を与えられ続けたのです。私がこの話が好きなのは、御言葉が現実私達を生かすということを教えられるからです。神の言葉は命の言葉ですから、信じる者の心の内部に命として入り込んで、神の命を発電する、私達の中にエネルギーを作ってくれる、私達の生涯を活性化してくれる、そして生きる力を作ってくれるのです。御言葉には力があるのです、私達を生かす言葉であり続けるのです。

いずれにしても、この個所は私達に「キリスト者とは、御言葉に生きる人、御言葉に生かされる人、そして御言葉に導かれて行く人である」ということをチャレンジするのです。それが、やがてこの世にどんなことがやって来ても、それに備えるための唯一の方法なのです。どんなに熱心でも、御言葉に結びつかない信仰は、やはり弱いと思います。

しかし、私は今日「御言葉と共に生きて行きましょう」ということだけを言いたいのではないのです。何と言って良いか、言い方が難しいのですが、もう一步踏み込んで、御言葉にとらえられる、御言葉に生きざるを得ないほどにとらえられる、そのような信仰生活であることが出来ればと、それが、私達が最終的に求めて行く姿ではないかと思うのです。

教会暦では、まだ降誕節が続いていますが、こんな話があります。

クリスマス夜、1人の女の子が刑務所にやって来て守衛さんに言いました。実は女の子のお父さんは、犯罪者として捕まえられていたのです。「おじさん、お父さんに合わせて下さい」。「ダメだ。とっくに面会時間は過ぎている。明日来なさい」。「お父さんにクリスマスプレゼントを渡すだけなんです。明日になればクリスマスは終わってしまいます。お願いします」。とうとう女の子は泣き出してしまいました。そこに所長が通りかかり、可哀そうに思った所長は「おじさんがそのプレゼントをお父さんに渡して上げよう」と言ってプレゼントを受け取りました。実はその女の子のお父さんは、手の付けられない囚人でした。乱暴で刑務所の規則なんか守らない囚人でした。所長からプレゼントを受け取ったその男は、リボンをほどこきました。中に1枚の紙切れがありました。「大好きなお父さんへ。お父さんが犯罪者だということが恥ずかしいといって、お母さんは家を出てしまいました。クリスマスに、お父さんにプレゼントを贈りたいと思いましたが、お金がありません。そこで、お父さんが優しくなでてくれた私の赤い巻き毛の髪を切りました。これを、今年のプレゼントにします。お父さん、私は、どんなに辛くても、さびしくっても、お父さんが帰ってくるまでがんばります。お父さんもがんばってください。刑務所は寒いと思います。お父さん、風邪を引かないで…」。読んで行く男の目に、どっと涙があふれました。男は、箱の中から赤い巻き毛を掴み出すと、その中に顔をうずめて泣きました。肩を震わせて泣きました。その次の日、男は、まるで別人のようになっていました。刑務所の中で、最も模範的な囚人に生まれ変わったのです。

愛のメッセージは、本当にそれを受け取れば、私達をとらえ、私達を変え、私達を生かす土台となります。御言葉は、私達のために死んで下さった主からの、命がけの愛のメッセージです。いつでも、それが生きる土台となるような信仰生活でありたいと願います。